
いわて協創グローバル人材育成プログラム

令和 7 年度 活動報告書



いわてグローバル人材育成推進協議会

目 次

いわて協創グローバル人材育成プログラムについて	1
令和7年度 いわて協創グローバル人材育成プログラム 派遣学生一覧	3
派遣学生報告書 阿部 楓	5
派遣学生報告書 佐藤 鈴音	9
派遣学生報告書 黒沼 杏奈	12
派遣学生報告書 川原 峻	17
派遣学生報告書 森 千種	20
派遣学生報告書 浅水 心結	24
当協議会における海外留学派遣支援実績	28
令和7年度 いわてグローバル人材育成推進協議会 年間取組状況	32
「いわてグローバル人材育成推進協議会」会員企業・団体	33

いわて協創グローバル人材育成プログラムについて

1 目的

本事業では、「グローバル」な視点から、地域の課題や豊富なリソースを現実的かつ創造的に見極め、課題を解決するとともに、岩手県の潜在的価値を最大限に引き出し、将来の岩手県を導くリーダー人材を、産学官一体となって育成することを目指します。

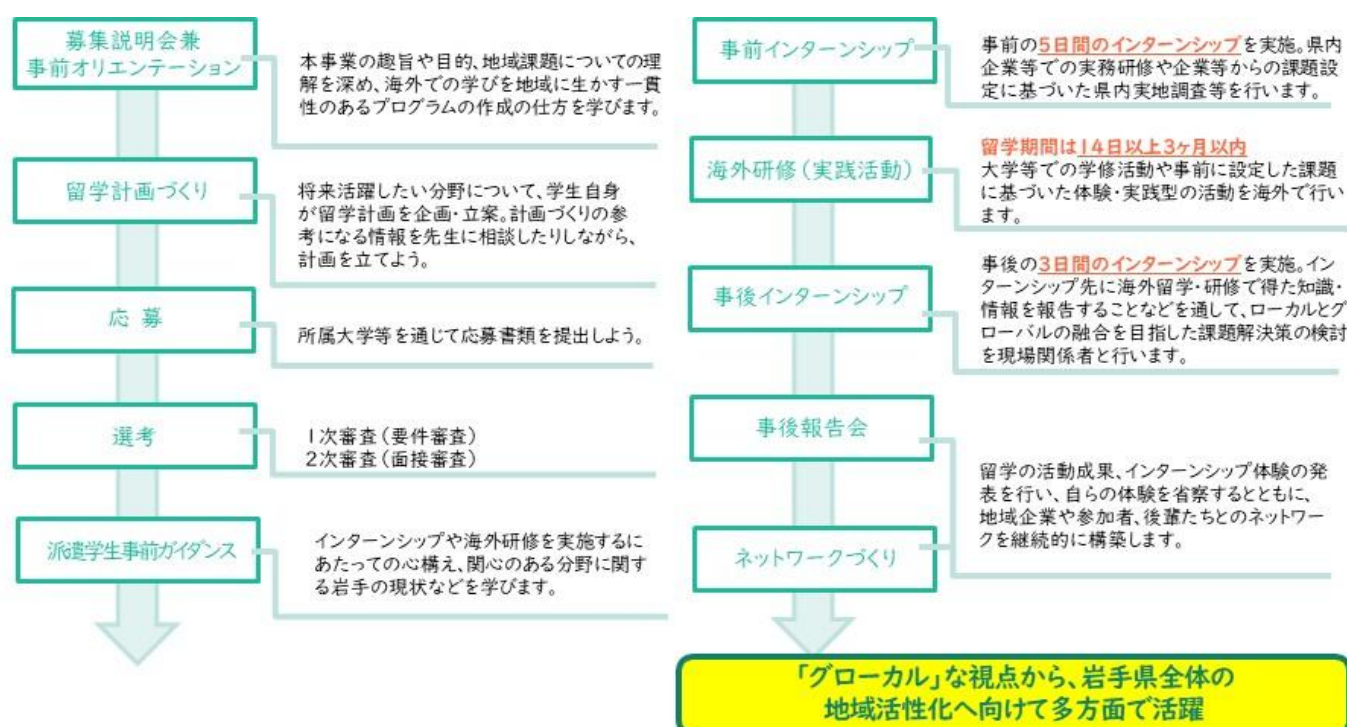
2 プログラム

- A. 県産品販路開拓人材育成プログラム
- B. ものづくり産業海外展開人材育成プログラム
- C. 交流人口拡大促進人材育成プログラム
- D. 持続可能型地域づくり人材育成プログラム
- E. 多様性人材育成プログラム

3 プログラム構成

応募予定の学生は、事前に実施される「募集説明会兼事前オリエンテーション」に参加し、本事業について理解した上で、コーディネーターや事務局に相談をしながらプログラムを作成し、応募します。

審査に合格し、採用された学生は留学期間前に事前ガイダンスに参加、県内企業などでの事前インターンシップを行った後、14日以上3か月以内の海外留学・研修を行います。帰国後は、研修成果を地域に還元することを目的に、県内企業などでの事後インターンシップを行います。



4 令和7年度実施スケジュール

内 容	令和7年度募集
募集期間	2/20～5/15
募集説明会	3月～4月
要件審査	5/16～5/22
面接審査	6/7
派遣学生決定	6/11
事前ガイダンス	7/12
事前インターンシップ	留学開始前に5日以上実施
海外留学開始	8/7～3/15
事後インターンシップ	留学実施後速やかに3日以上実施
成果報告会	令和8年6月16日

令和7年度 いわて協創グローバル人材育成プログラム 派遣学生一覧

1	申請プログラム		E 多様性地域人材育成プログラム		
	氏名等	アベ カエデ 阿部 楓	岩手県立大学 盛岡短期大学部 国際文化学科		2年※
	留学テーマ	岩手の文化を伝えられる、 生活に寄り添った日本語教師を目指して		留学先	インドネシア
	留学期間	2025年8月13日～8月29日			17日間
	インターン シップ先	事前	TVA日本語教室、盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校、 (公財)花巻国際交流協会		
		事後	TVA日本語教室、盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校		

2	申請プログラム		D 持続可能型地域づくりプラン		
	氏名等	サトウ スズネ 佐藤 鈴音	岩手大学 理工学部 システム創成工学科 機械科学コース		3年※
	留学テーマ	フィリピンで学ぶ、ボーダーレスな地域づくり		留学先	フィリピン
	留学期間	2026年2月10日～3月31日			50日間
	インターン シップ先	事前	一関市国際交流協会		
		事後	一関市国際交流協会		

3	申請プログラム		E 多様性地域人材育成プログラム		
	氏名等	クロスマ アンナ 黒沼 杏奈	岩手大学 教育学部 特別支援教育コース		3年※
	留学テーマ	インクルーシブ教育推進のための 孤児スクールボランティア		留学先	タイ
	留学期間	2026年2月14日～2月28日			15日間
	インターン シップ先	事前	YUME School 盛岡校		
		事後	YUME School 盛岡校		

4	申請プログラム		D 持続可能型地域づくりプラン		
	氏名等	カワハラ リョウ 川原 峻	一関工業高等専門学校 未来創造工学科 化学・バイオ系		4年※
	留学テーマ	フォトバイオリアクターの開発・設置に向けた議論		留学先	フランス
	留学期間	2025年9月8日～10月2日			25日間
	インターン シップ先	事前	岩手県南技術センター		
		事後	岩手県南技術センター		

5	申請プログラム		D 持続可能型地域づくりプラン	
	氏名等	モリ 森	チグサ 千種	一関工業高等専門学校 未来創造工学科 化学・バイオ系 4 年※
	留学テーマ	岩手の資源を生かす香りと暮らし ～フランスから学ぶ持続可能なライフスタイル～		留学先 フランス
	留学期間	2025 年 9 月 8 日～10 月 2 日		25 日間
	インターン シップ先	事前	株式会社デジアイズ	
		事後	株式会社デジアイズ	

6	申請プログラム		D 持続可能型地域づくりプラン	
	氏名等	アサミズ 浅水	コリン 心結	富士大学 経済学部 経営法学科 2 年※
	留学テーマ	子どもたちの成長と郷土愛の育成： スコットランドにおける文化継承の取り組みからの示唆		留学先 スコットランド
	留学期間	2025 年 8 月 16 日～9 月 14 日		30 日間
	インターン シップ先	事前	花巻北中学校	
		事後	日興電気株式会社	

※派遣時点の学年



1 留学テーマ

岩手の文化を伝えられる、生活に寄り添った日本語教師を目指して

2 事前事後インターンシップでの取り組み内容及び成果

【事前インターン】

インターン先①： 盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校 日本語学科

<活動内容>

- ・入試面接練習等指導体験
- ・学生にアンケート（日本での生活について）
- ・教員にインタビュー

<成果>

県内の日本語学校における授業内容や、指導に当たって重視されている点を学びたいと考えた。活動を通して、単に言葉を教えるだけではなく、その背景にある文化や生活習慣を、学習者にとって理解しやすい形で伝える力が求められると感じた。また、学生に実施した日本の文化と生活についてのアンケートでは、「病院や銀行での会話が最も不安」という回答を得た。日本語で難しいと感じる部分の問いに対しては、「漢字が難しい」という回答が多かったことから、多言語パネル作成時には、ふりがなを付けて分かりやすくするよう気を付けたい。

インターン先②： TVA 日本語教室

<活動内容>

- ・日本語の会話練習と学習補助
- ・日本語で文化交流

<成果>

学校とは異なり、ネイティブの日本人と実際の会話を通して、学習者がどのように日本語を学習しているのかを見て、体験的に理解することができた。また、ボランティアで日本語を教えている方にインタビューをした際には、「外国人学習者には教えることを強制するのではなく、学びたい人を支える姿勢が大切である」というお話を伺い、深く印象に残った。やさしい日本語を意識しつつ、相手の立場に立った柔軟なコミュニケーション力を養うことができた。

インターン先③：公益財団法人 花巻国際交流協会

<活動内容>

はなまき日本語サポーターズ『ステップ』の日本語講座見学・講師にインタビュー

<成果>

日本語教育の場で使われている教科書に載っている日本語と、生活の中で使われている生きた日本語は異なると知った。普段の会話で使われている言葉には曖昧な言い回しも多く、それぞれの適切な使い方を場面ごとに説明する方法を学んだ。

【事後インターン】

インターン先①：盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校 日本語学科

<活動内容>

- ・新入生の入国後諸手続きの補助
- ・留学報告
- ・学生にアンケート（多言語パネルについて）

<成果>

新入生の手続きの補助では、留学先で学んだ言葉の言い換えを意識しながら、岩手の冬の過ごし方や、ごみ捨てのルールについて話すことができた。手続きには複雑な部分も多く、アンケートで「特に不安な場面」という質問で市役所という意見が多かった理由が分かった。また先生方に行った留学報告では、ジャカルタと岩手の日本語学校の違いを PowerPoint で発表した。留学先では、授業中に母国語を話した学生に日本語の罰ゲームを行ったり、ミニゲームや会話練習を中心に授業が進められていたことに興味を示してくださり、今後の教育に取り入れることを検討するとおっしゃっていた。最後に、事前アンケートと留学先でのアンケート結果を元に作成した多言語パネル案について、学生へのアンケート調査を実施した。AI で作成したイラストを用いて、スーパーでの買い物を想定した食品成分表と銀行での取引を選択できるパネルを見てもらったが、イラストが難しく「わかりづらい」という意見があり、改善が必要だと感じた。一方で、学生の約 8 割は「パネルがあれば助かる」と回答しており、有用性も確認できた。

インターン先②：TVA 日本語教室

<活動内容>

- ・日本語の会話練習と文化交流
- ・インドネシアと日本の生活習慣の違いを共有

<成果>

帰国後、1 回目のインターンではインドネシア出身の方々との日本語会話練習を行った。留学先で「ハラールフード（イスラム教徒が食べられる食品）が日本の地方にあるか心配」との声を聞いたこ

ともあり、県内のハラルレストランの情報だけでなく、見た目ではわかりにくい豚肉由来の製品についても共有できたことは、今回の留学に参加したからこそできた経験である。また、日本人サポーターとは、ジェスチャーの意味の違いや公共施設の使い方の違いを説明するなど、日本人向けの異文化理解の活動にも取り組むことができた。



図 1 漢字の授業の様子

3 留学先での取り組み内容及び成果

留学先：Sakura JLC 日本語講座

＜活動内容＞

- ・通常授業の見学・指導
- ・日本文化や習慣を教える。
(折り紙、けん玉、盛岡さんさ)
- ・面接やスーパーでの会話練習
- ・日本生活についてのアンケート実施（生徒・教員）

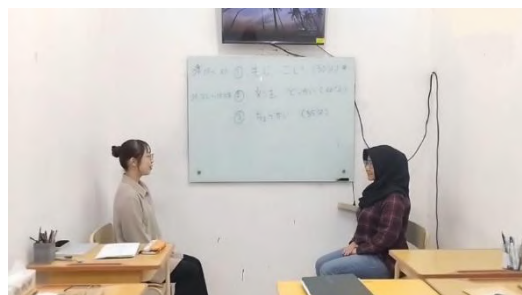


図 2 面接練習の様子

週4日の集中クラスと、週末クラス、オンラインクラスに参加した。現地の先生方と話し合いながら、教科書に沿った内容だけでなく、言葉の成り立ち・日本語ネイティブの表現方法を授業で取り扱った(図1)。またインドネシアには日本のような面接文化がないと聞き、それぞれの動作の説明をしながら会話テストを行った(図2)。買い物や人・ものを説明する時の日本語表現を教えるとともに、生徒からインドネシアの民族語や地域ごとに異なる文化を学べたことも、とても印象的だった。

＜成果＞

レベルの異なるクラスで授業をした際には、生徒が間違いやすい点を見極め、相手のレベルに合わせて言葉の難易度を調整することの重要性を実感した。文化紹介では、折り紙やけん玉など伝統的な遊びをテーマに紹介したところ、多くの生徒が興味を示し関心を深めてくれたことが嬉しかった。岩手県の紹介でも、岩手を知らなかった生徒たちが熱心に質問してくれたことは印象深い経験となった。自分の言葉で地元の魅力を発信し、それをきっかけに「行ってみたい」と言ってくれた生徒がいたことは、小さくても確かな地域貢献につながったと感じている。

アンケートでは、日本に行きたいと考えている50名以上の人々から意見を得ることができた。当初想定していた結果とは異なる回答も多く、特にSuicaの使い方や駅での乗り換え、ハラルフードの入手に関する不安の声が目立った。これは日本人や既に日本に住んでいる外国人にとって気づきにくい点であるため、今後の取り組み方法を考える大きな手掛かりになった。

また、知人の紹介でジャカルタの日本人コミュニティの方々とも意見交換する機会を得た。現地で

の日本語教師のニーズや外から見た日本の生活習慣について貴重なお話を伺い、知見を深めることができたことも大きな成果の1つである。

4 当プログラムに参加しての感想・協賛企業へのメッセージ

以前は、日本語教師の需要が高まる中で、どのような人材が求められているのか分からず、不安を抱えていました。しかし、県内インターンシップや留学を通して多様な学習者の方々と関わり、指導を体験する中で、「相手を理解しようとする姿勢」と「褒めて伸ばす指導」が、自分らしい教育スタイルであることに気付くことができました。学習者一人ひとりの背景や気持ちに寄り添い、前向きな言葉で成長を支えることの大切さを実感し、自分が目指す日本語教師像がより明確になりました。また、積極的に声をかけたり、自発的に行動したりする力も身についたと感じています。初めて一人で海外に渡り、多文化環境の中で研修を受けるという経験は決して簡単なものではありませんでしたが、そのひとつひとつの経験が自信となり、今後の学びや挑戦を後押ししてくれる貴重な財産となりました。

このように充実した研修を有意義に行うことができたのは、協賛企業の皆さまのご支援とご協力のおかげです。学びの機会を提供していただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。今回いただいたご縁をこのプログラム内だけで終わらせるのではなく、県立短期大学での会話練習の実施や、地域でのボランティア活動などを継続的に行っていきたいと考えています。

また、今後も岩手県の日本語教育に携わりながら学習者支援を続け、将来は岩手県民と外国人が互いに学び合い、共生できる地域社会の実現に貢献できる日本語教師を目指します。そのために、学習者一人ひとりの背景やニーズに合った指導を行うとともに、分かりやすい多言語パネル作成を通じて相互理解を深める取組みを継続していきたいと考えています。ご支援いただき、本当にありがとうございました。

5 留学費用について

総費用 23 万円 内奨学金 16 万円

(内訳 渡航費 10 万円、ホテル宿泊費 9 万円、保険 7 千円、VISA 5 千円、その他 2 万)

6 語学力について

留学前は、大学のインドネシア語（Ⅰ～Ⅲ）の授業内で勉強していたが、会話は初級のみ理解できるレベルであった。留学に向けて、本学のネイティブの学生に協力してもらい、会話練習を行った。留学先の日本語学校では日本語での会話がほとんどだったが、日本語能力検定 N5 レベルのクラスで説明に交えて使うことで、アウトプットの場面を増やし、上達できた。現地では英語を話せる人は空港や主要観光地に限られており、インドネシア語でのコミュニケーションが必須だった。最低限の買い物や日常会話は行うことができ、リスニング力を向上させることができたが、相手が詳しく説明してくれた内容が理解できず悔しかった。

現在は、大学のインドネシア語（Ⅳ）の授業の際に、今回お世話になった現地の日本語学校とオンライン会話練習を実施するなど、生の言語を忘れないよう継続的に勉強している。



1 留学テーマ

フィリピンで学ぶ、ボーダーレスな地域づくり

2 事前事後インターンシップでの取り組み内容及び成果

○事前インターンシップ

事前インターンシップでは、NPO 法人一関市国際交流協会にて、国際交流事業の運営補助を行った。主な活動として、イベントチラシの仕分けや配布準備、広報・告知に関する作業を担当した。活動を通して、一関市内のどのような場所や機関と連携しながら情報発信を行っているのかを知ることができ、地域全体で国際交流事業を支えていることを実感した。また、実際に行われているイベント内容についても理解を深めることができた。

さらに、職員の方へのヒアリングを通して、一関市国際交流協会は「国際交流イベントを行う場」であるだけでなく、在住外国人や地域住民が困った際の相談窓口としての役割を担っていることを学んだ。特に印象的だったのは、協会自身がすべてを解決するのではなく、適切な地域の人や機関へつなぐことで課題解決を行っている点である。地域とのつながりを活かしながら、多様な人を支える仕組みづくりが行われていることを知り、地域連携の重要性を強く感じた。

加えて、事後インターンシップで実施予定のワークショップの企画書作成も行った。事前インターンシップで学んだ「地域とのつながり」を意識しながら、国籍や立場を越えて交流できる、ボーダーレスな地域づくりにつながる内容を職員の方と一緒に検討した。

事前インターンシップを通して、生まれ育った一関市で国際交流事業がどのように行われているのかを知り、地域の取り組みについて深く理解できたことが非常に有意義だった。

○事後インターンシップ

未実施（2026年5月下旬～6月上旬、NPO 法人一関市国際交流協会にて実施予定）。

3 留学先での取り組み内容及び成果

私は、フィリピン・イロイロ市にある NGO LOOB という団体で、49 日間のインターンシップを行った。具体的には、日本人学生と現地学生が参加する SDGs に関するスタディーツアーの運営サポートスタッフとして活動した。通訳だけでなく、参加学生同士が円滑にコミュニケーションを取れるよ

うファシリテーションを行ったり、プログラムが時間通りに進行するよう現地スタッフと協力しながら参加者への指示出しやサポートを行ったりした。

スタディーツアーは 1～2 週間という限られた期間で行われるため、短い時間の中で参加学生が大きく成長し、強い絆を築いていく姿を間近で見ることができたことが非常に印象的だった。また、自分自身の関わり方や声掛けが、参加者の行動や雰囲気にもすぐ反映されることにやりがいを感じた。プログラム中にはトラブルや課題も発生したが、日本人学生・現地学生・ボランティア・スタッフが協力しながら解決していく経験を通して、リーダーシップやサポート力、人と人をつなげる力が大きく成長したと感じている。また、異文化の中で生活する上で、ポジティブなことだけでなく、自分が感じた違和感や考えも率直に伝えることを意識していた。その経験から、日本語・英語の両方において、自分の考えを相手に分かりやすく伝える力が向上したと感じている。プログラム内では、ゴミ処理場周辺に住む住民へのインタビューや、小学校で日本文化を紹介する活動なども行った。観光では見えない地域の現状や課題を実際に自分の目で見て、その土地に入り込んで学ぶことができたことは非常に貴重な経験だった。

さらに、プログラム外でも 2 回のホームステイを経験し、現地の大学で 6 時間にわたり日本語を教える活動にも挑戦した。ホームステイでは、生活環境や価値観の違う人々と共に暮らしながら、問題が起きても逃げずに話し合い、協力しながら生活していく姿勢に強く感銘を受けた。また、フィリピンでは家族や近所の人々とのつながりが非常に強く、子育ても地域全体で支え合いながら行われている様子を目にし、人とのつながりの大切さを改めて実感した。また、日本と比べると生活水準は決して高いとは言えない中でも、人々が毎日を大切に、自分たちなりの幸せを大事にしながら生きている姿がとても印象的だった。この経験から、人の豊かさや幸せはお金だけで決まるものではないことを強く感じた。

今回の留学を通して、国籍だけでなく、性別や育った環境、経済状況など、さまざまな違いを持った人々同士でも、互いに支え合いながら共に生きていくことができるということを実感した。フィリピン人と日本人が協力し、一つの目標に向かって取り組む姿を見たことで、多様性を受け入れながら共に生きる社会の大切さを深く学ぶことができた。

4 当プログラムに参加しての感想・協賛企業へのメッセージ

この度は、本プログラムをご支援いただき、本当にありがとうございました。今回のプログラムへの参加は、私にとって人生の大きな転機となる経験でした。私は今回のインターンシップで、人生で初めて発展途上国と呼ばれる地域で生活しました。日本とは大きく異なる環境や生活に最初は驚きや戸惑いもありましたが、その一方で、現地の人々の持つ力強さや、互いに助け合いながら生きていく姿勢に深く感銘を受けました。経済的な豊かさだけでは測れない、人とのつながりや支え合いの大切さを実感し、自分自身の価値観や考え方にも大きな影響を与えてくれました。

また、今回の留学では、「ボーダーレスな地域づくりについて学びたい」という明確な目的を持って

参加しました。ただ海外を訪れるだけでなく、自分自身でテーマを持って飛び込んだからこそ、多くの学びや気づきを得ることができたと感じています。現地では、スタディーツアー運営やホームステイ、日本語教育など、毎日全力で挑戦を続け、自分の強みを最大限に活かしながら行動することができました。このように、毎日 100%以上で取り組んだ経験は、自分にとって大きな自信につながっています。

今後は、今回学んだことや感じたことを、自分の地元である一関市や岩手県に還元していきたいと考えています。そして、自分自身も引き続き、多様な人々がつながり合える地域づくりに挑戦していきたいです。また、ぜひ次の世代の学生にも、このプログラムを通して「目的を持った留学・インターンシップ」に挑戦してほしいと感じています。目的を持って海外に飛び込み、自分自身で考えて行動する経験は、単なる旅行では得られない大きな成長につながると強く感じました。

このような貴重な経験ができたのは、ご支援いただいた協賛企業の皆様、本プログラム関係者の皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

5 留学費用について

・総費用：約 40 万円

(内訳 渡航費 8 万円、研修費 3 万円、食事・宿泊費 15 万円、移動費 1 万円、食費 4 万円、ビザ 1 万円、保険料 2 万円、通信費 1 万円、おみやげ代 5 万円)

・費用負担：自己負担 7 万、奨学金 33 万円



図 1：スタディーツアーの様子



図 2：ホームステイ先の様子

6 語学力について

留学前から日常会話程度の英語であればコミュニケーションを取ることはできていたが、現地ではディスカッションや活動説明などで使われる Academic English に苦戦する場面が多くあった。そのため、分からない単語や表現が出てきた際には、そのままにせず現地の人に質問し、簡単な英語に言い換えて説明してもらうことを意識していた。また、フィリピン特有の英語の訛りにも最初は聞き取りづらさを感じたが、2 週間ほど経つと徐々に慣れ、以前より自然に聞き取れるようになった。さらに、現地の言語であるタガログ語やヒリガイノン語についても、全く知らない状態で渡航したが、現地の人々とのコミュニケーションを通して少しずつ単語や簡単な表現を覚えることができた。インターンシップを通して、自分の英語力は大きく向上したと感じている。特に、相手の英語レベルに合わせて話すことや、誤解が生まれないように言葉を選びながら伝える力が身についた。また、現地の人々と日常的に交流する中で、英語を使って感情を伝えたり、場を和ませたりする表現力も向上したと感じている。

留 学 先： タイ アユタヤ

留学期間： 2026年2月14日～2月28日（15日間）



1 留学テーマ

孤児スクールボランティアでインクルーシブ教育の第一歩を!!

- ・多様な背景を持つすべてのこどもたちへの教育・支援のあり方を学ぶ。
- ・日本人として少数派に身を置き、異文化理解と多文化共生の視点の基盤を築く。

2 事前事後インターンシップでの取り組み内容及び成果

○場所：Yume school 盛岡校 盛岡駅近くのフリースクールに受け入れていただいた。

○取り組み内容

- ・事前：文化祭活動（バンド練習や展示制作、商品の袋詰め、本番、振り返りなど）
- ・事後：震災学習、3年生を送る会、卒業式（準備、本番）、留学体験発表

○成果

年に一度の行事である文化祭や卒業式などの活動に参加する中で、生徒が抱くワクワク感や不安、さらには家族や先生への感謝といったさまざまな感情に触れることができた。そして、インクルーシブ教育においては、単に同じ場で共に活動するだけでなく、自分自身や他者について理解するための時間を、意図的に設けることが重要であると感じた。

多様な活動の中では、生徒一人ひとりの好きなこと、得意、不得意が自然と現れ、それらを互いに理解し合い、学年を超えて尊重する姿が見られた。また、子ども同士で「大丈夫だよ」「やってみよう」と声を掛け合いながら、前向きに活動へ取り組む様子が印象的であった。

一方で、文化祭の振り返りでは、頑張った活動やそのときの感情、そう感じた理由などをワークシートに記入し、共有する時間が設けられ、活動中には表に出なかった不安や葛藤と向き合う時間となった。そこで生徒たちは、不安を抱くタイミングや内容、その理由も多様である一方で皆不安を感じていたということに気付き、ふっと緊張感が解ける様子があった。

共に活動するだけでは、他者理解が表面的なものにとどまってしまう可能性がある。しかし、振り返りを通して自分自身を理解することで、他者理解の枠組みも広がっていくように感じた。また、生徒が自分の気持ちを率直に語ることができたのは、日常的に「してあげる」「させる」のではなく、生徒の気持ちや選択を尊重しながら、自身の思いや願いも率直に伝え、同じ目線で関わる先生方の姿がモデルとなっていたからだと考えられる。そのような姿勢があるからこそ、生徒は安心して自分の気持ちを言葉で返すことができるのだと感じた。

振り返りは形式的になりがちであるが、その意義を十分に理解し、感情を抱え込まずに安心して適切に共有できる教室づくりが、公教育においても必要であると学ぶことができた。

3 留学先での取り組み内容及び成果

○留学先：ワット・サケーオ・スクール

幼稚園児から高校生が集まる世界最大規模の孤児スクール。

○目的：特別支援教育制度がまだ整っていない「ごちゃまぜ」の学校環境で、人種的少数派として言語がわからない環境で、皆で共に学ぶ方法や異文化理解等のヒントを得ること。

○取り組み内容

・子どもたちとの交流：平日は幼稚園から高校までの子どもと午前8時から午後4時まで、交流をした。授業中や昼食、昼休みに遊んだり、互いの生活の話をしたりした。土日は寮に訪問し、午前9時頃から午後4時頃まで外で思い切り遊んだ。子どもたちは次々と新しい遊びを求めており、ネタ切れにならないように必死だった。

・日本語授業補助：中高生の日本語の授業で机間巡視をしながら、主に発音指導を行った。

○成果

(1) 私が見つけたインクルーシブ教育

「今」を生きるすべての人が大切にされる学校を、多様な方法でつくっていくこと。

(2) 現地の様子や活動をしながらかんじたこと、考えたこと

①授業スタイル：授業は50分間で、最初に教師が約10分説明した後、各自が教科書の問題に取り組む形式が多かった。問題を一人で集中して解く子もいれば、友達と教え合う子、遊ぶ子もあり、教師の指示後、すぐに課題に取り組まなくても、立ち歩いたり多少騒がしくなったりしても、止められることはなかった。そこには子どもへの理解と信頼があるように感じられた。教師によっては、白板の前で寝そべりながら話を聞いていても問題はなかった。



糸電話が流行る授業中の教室



折り紙で作った名札と子どもたち



②「今」を生きる子どもたち

寮には想像以上におもちゃが少なく、折り紙やけん玉を出すと、子どもたちは一斉に集まってきた。おもちゃはすぐに使い切れ、時には壊れてしまうこともあった。それでもなくなることを気にせず、今やりたいことを全力で楽しんでいた。

大人は、将来への不安や期待から結果を逆算した教育をしがちである。しかし、未来ばかりを見て、子どもが「今」を生きていることを忘れてはいないだろうか。大人の期待や不安が子どもの今ある可能性を奪っていないか、改めて考える必要があると感じた。

③コミュニケーションについて

子どもたちは言葉が伝わらなくてもあきらめず、目線や表情、身振りで伝えたいことを必死に伝えようとしてくれた。言葉は重要な手段ではあるが、コミュニケーションのすべてではない。伝えられる相手だけに伝えるのではなく、伝え方を工夫することが重要だと感じた。多様なコミュニケーションを保障することが、子どもの多様な生き方や学び方を支え、安心できる居場所づくりにつながるのではないかと考えた。



④教師の生き方、働き方について

先生から話を聞くと、学校は政府の援助削減、現地の人手不足（子どもが合計 500 人ほどいる男子寮・女子寮の世話役の大人は一人ずつ）、コロナ禍後のボランティア不足など様々な問題を抱えていたが、先生はとにかく自由で楽しそうに見えた。職員室もいつも和気あいあいとしており、空き時間も仕事より、息抜きをしている時間が多かったように感じる。年齢や性別に関係なく、対等な関係が築かれていたように感じた。

子どもが安心して過ごせるようにするには、まず周囲の大人が安心できる環境づくりをすることが重要だと感じた。教師同士が対等な関係を築けず、安心できていない学校で子どもには安心させようというのは難しい。安心できる教室だけでなく、安心できる職員室についても考える必要があると感じた。

⑤違いに鈍感な私たち一寛容でいるということ

タイではジェンダー多様性が比較的受け入れられており、寮や学校にはトランスジェンダー的な子どももいたが、彼らは日常に溶け込んでいた。また、人口の大半が仏教徒である一方、イスラム教徒の服装をした人々も当たり前存在していた。

私たちは、目に見える違いに対しては、「この人はこういう背景をもつ人なのだ」と理解しやすく、その違いを前提として関わるができる。しかし一方で、相手は自分と同じであるという無意識の期待を抱いている場合、その期待が裏切られたときに、相手を「自分とは違う存在」として強く意識

してしまうことがあるのではないだろうか。

本来は一人ひとりが異なる存在であり、多様な人々で社会が構成されているのにもかかわらず、私たちは属性やカテゴリーの違いばかりで他者を判断してしまい、個人を見失ってしまいがちである。学び方や生き方に違いがあることを理解し、それを前提に関係を築いていくことが、真の寛容さにつながるのではないかと感じた。

(3) インターンシップと共通した学び

プログラム全体で感じたのは、人々は多様でありながら、その中に変わらないものがあるということである。誰一人として同じ存在はいないが、誰もが同じ社会で様々な感情や思いを抱きながら行動しており、その時感じる気持ちをないがしろにされると誰もが傷つくということである。教師の教えやすさに合わせるのではなく、多様な子どもや同僚がいることを前提に、子どもが安心して過ごしたい気持ち、学びたい気持ち、育ちたい方向を教師が看取っていくことが重要であり、インクルーシブ教育の本質は、多様な学びの場ではなく、多様な生き方や学び方を保障することにあるということを実感した。

既に社会の中に存在している多様性に気付き、そして皆が同じ社会で「今」を生きているという事実を共有することがまず重要なのではないだろうか。そのような視点に立ち、誰もが生きやすい社会や学校について考え続けられる教員になりたいと考えた。

4 当プログラムに参加しての感想・協賛企業へのメッセージ

中学校社会科の教員を目指す者として、今回の留学では、田舎での学校活動やホームステイを通して、教科書だけでは知ることのできない現地の人々の暮らしや思いに触れ、現実を自分の目で見て感じる事ができた点に大きな意義を感じている。



高校3年生。左端の生徒は3年の日本留学が決まっていた。

ボランティア先では、約1,500人の子どものうち約500人が貧困や両親不在のため寮で生活している。しかし、18歳の生徒に話を聞くと、進学や就きたい仕事に決まっている子が多くいた。また、中学生にも、中国語教師や看護師を目指す子がおり、孤児や貧困であることが、夢や目標に大きく影響している様子は、2週間の中では見られなかった。

海外の孤児スクールを訪れたことで、その現実を知るとともに、日本では見えにくくなっている問題も改めて考える契機となった。タイと日本の貧困は質の異なるものであるが、日本にも貧困は確かに存在しており、それが子どもの将来に大きく影響するという現実がある。

私自身、留学を簡単にできるほど裕福な家庭で育ったわけではない。しかし、今回奨学金による支援を受けたことで、自身の目標に大きく近づくことができた。この経験を通して、自分の中の当たり

前はさらに広がり、インクルーシブ教育実現のヒントを得ることができた。

今後も自身の目標に向けて学びと努力を重ねるとともに、誰かの夢や目標を応援できる存在でありたいと考えている。そのように思えるようになったのも、今回支援していただいたおかげである。この経験を岩手に、そして誰かの夢へと還元できるよう、尽力していきたい。

5 留学費用について

○総額：296,270 円(自己負担：79,870 円)

- ・ CEC Japan プログラム費用(14 泊 15 日)：146,400 円
 - － ボランティア活動指導費 60,400 円、ホームステイ滞在費 56,000 円(支給あり)
 - － 空港往復送迎費 30,000 円
- ・ 移動：航空券 118,870 円(一部支給あり)、盛岡－東京間(夜行バス)：11,000 円
- ・ 雑費：20,000 円

6 語学力について

○英語：簡単な英語ができるとよい。現地のコーディネーターと連絡を取り合うときは英語で行うが、翻訳機能等を用いれば十分。

○タイ語：子どもとも翻訳機能を使って話せるが、下記のような簡単なものを覚えていくとよい。

・ こんにちは、ありがとう、すみません、大丈夫、良い、楽しい、きれい、疲れる、休む、行く、食べる、遊ぶ、暑い、寂しい、嬉しい、～したい、数字、こそあど言葉、5W1H、自己紹介、「どこに行きますか？」。



1 留学テーマ

フォトバイオリアクターの設置・開発に向けた議論

2 事前事後インターンシップでの取り組み内容及び成果

本インターンシップは、県南技術研究センターの高度な分析設備を活用し、分析技術の習得と実践的な課題解決に取り組んだ。

（前半:装置の操作技術習得・実践的な解析操作）

センターの設備紹介を通じて分析環境への理解を深めた後、実際に依頼のあった調査物品に対し、HPLC（高速液体クロマトグラフィー）を用いたメッキ成分の特定や、マイクロ스코プによる電子基板の不具合箇所特定といった解析業務を行った。

（成果）

フランスでの研究に向けて、主要な分析装置の基礎原理を再確認するとともに、正確な操作技術について実践形式で習得することができた。

（後半:フランス留学の経験を踏まえたより実践的な分析操作）

後半期間では、SEM（走査型電子顕微鏡）を用いた物品の表面微細構造の観察や、EDX（エネルギー分散型 X 線分析装置）による物質内部の元素分布・欠陥調査を実施した。

（成果）

フランス留学中の研究において痛感した「適切な手法選択」という課題に対し、前半のインターンシップで触れることができなかった装置について指導していただいたことで、分析操作を行うときの選択肢の拡大、実戦的なアプローチを学ぶことができた。学校で学んだ理論を実地に適用することで、自身の理解が不十分な箇所を明確化できただけでなく、得られた結果から論理的に原因を特定するプロセスを経験した。留学で培った主体性に加え、本インターンシップで得た「多角的な分析視点」を掛け合わせることで、今後の研究をより高い精度で進めていけるだろう。

3 留学先での取り組み内容及び成果

フランスの IUT de Béthune では、Jolan Rousseau 教授の指導のもと、有機金属フレームワーク (MOF) を用いた光触媒反応による有機汚染物質の分解に関する研究に携わった。本プロジェクトでは、ビーカー内の溶液に対して効率的に光触媒反応を起こさせるための反応器設計を担当し、将来的な目標である「フォトバイオリアクターの開発・設置」の土台となる、理想の実験環境を自ら構築する技術の習得を目指した。具体的には、英語の論文から必要な仕様を読み解き、3DCAD を用いて反応器の 3D モデル作成や、外部モジュールを装着するための専用キャップの設計を行った。不慣れなソフトに加え、説明書や教員とのやり取りが全て英語であったため非常に苦戦したが、装置をオーダーメイドで自作する手法を学んだことは、研究の自由度を高めるだけでなく、フォトバイオリアクターの社会実装に不可欠なコスト管理や実験精度の向上においても極めて有用であり、今後の活動において大きな強みになると確信している。

また、現地の学生と共に参加した多段式蒸留の実験では、材料系を志望する私にとって専門外である有機・バイオ系のプロセスに触れる貴重な機会を得た。実験の大枠は理解できたものの、高度な専門用語が飛び交う英語での議論や結果の記述には限界を感じ、語学面での課題を痛感する経験となった。しかし、学生実験に参加することで実際にどのように分離・精製されるのかという一連の工程を日本語以外で学ぶという貴重な経験を得ることができた。これは今後の研究活動やリアクター開発における多角的な視点の確保や国際化する社会において将来的に海外の方と研究を行う際に生きてくると考える。

これらの経験を通じて、未知の分野や言語の壁に対しても果敢に挑戦する主体性と、専門領域を横断して物事を捉える科学者としての基礎を築くことができた。ここで得た知見を、将来のフォトバイオリアクター開発という大きな目標に広く活用していく考えである。

4 当プログラムに参加しての感想・協賛企業へのメッセージ

当プログラムへの参加は、海外留学を行う勇気のなかった私にとって大きな後押しになった。留学を通して、自分は日本を出たときにどのように評価されるのかを知り、今の自分に足りないものを明確にすることができた。また異文化交流を通して自分の中の価値観を大きく広げることができ、今後の進路として海外の大学への進学やグローバルに活躍することに対し、より明確なビジョンを持つことができた。これからの学習計画や進路設計に対し良い意味で大きな変化をもたらすことができたことも踏まえ、今回の留学は非常に実りあるものであったと考える。

本プログラムを通じて、異なる文化や価値観に直接触れる貴重な機会を得ることができた。現地での学びや交流は言語や文化の違いに戸惑うことがあったが、語学力だけではなく、主体性や多角的な視点を養う大きなきっかけとなり、学ぶ楽しさと自分の可能性を感じる経験となった。

このような貴重な留学の機会をご支援くださった協賛企業・団体を始めとしたグローバル協議会、学校の事務局、指導教官、インターンシップ先である県南技術研究センターの皆様にも心より感謝申し上げます。

5 留学費用について

留学費用に関して、日本国内の移動費が往復 3 万円前後、日本・フランス間の航空券が往復 21 万円、パリ・ベテューヌ間の移動費が往復 2 万円、留学中の滞在費用(ホームステイ・食費込み)は 7 万円であった。よって合計は約 32 万円となった。

6 語学力について

語学力に関して、授業等での会話はおよそ理解することができたが、実際に会話するには経験や単語力が足りないため十分に自分の考えや思いを伝えることができなかった。しかしこれらのように現時点での自分の語学力について知ることができ、具体的な問題点を把握することができたため、日々の英語学習を強化することによって改善が見込めると考えられる。TOEIC のスコアに関しても留学前から留学後にかけて 200 点ほど上昇し今後も上昇が見込めるため、今回の留学は語学力強化の役に立った。



1 留学テーマ

岩手の資源を活かす香りと暮らし～フランスから学ぶ持続可能なライフスタイル～

2 事前事後インターンシップでの取り組み内容及び成果

・事前インターンシップ（株式会社デジアイズ）

事前インターンシップでは、製品開発の現場において求められる実務的視点を多角的に学んだ。環境の視点からは、斗々屋や奥州市の事例を通じて、環境負荷を低減するためにはゼロウェイストやリサイクルといった仕組みづくりだけでなく、市民一人ひとりの意識や行動が不可欠であることを実感した。仕組みが整っていても、実際に利用されなければ十分な効果は得られないという現場の現実を学んだ。

製品開発の視点では、開発には大きなやりがいや面白さがある一方で、長期間にわたる試行錯誤と重い責任が伴うことを強く感じた。特に印象に残ったのは、作り手のこだわりが必ずしも消費者にそのまま伝わるとは限らない点と、環境負荷の低減とコストの両立が容易ではないという現実である。

また、ターゲット設定を明確にすることで設計の優先順位が整理されるプロセスを学び、技術者には常に「お客様の視点」が求められることを実感した。

さらに、AIの活用事例として画像検査やチャットボットについて学び、作業効率や精度を向上させる大きな可能性を感じた一方、適切なデータの準備や人間との役割分担が不可欠であり、AIは万能ではなく人を支援する技術であることも理解した。

マーケティングの観点では、国や地域によって生活習慣や価値観が異なるため、同じ製品やサービスであってもそのままでは受け入れられない場合があることを学び、ローカライズの重要性を認識した。

・事後インターンシップ（株式会社デジアイズ）

事後インターンシップでは、留学および事前インターンで得た学びを整理し、スライドを用いて企業の方々に共有した。その後、アンケート調査や現地視察の結果をもとに、成果の分析や製品コンセプトについて意見交換を行った。

自分自身は、データに基づいて製品の方向性を考える役割を担い、企業の方の実務的な視点とすり合わせながら議論に参加した。この経験を通じて、アイデアだけでなく根拠をもって提案する重要性を学んだ。

3 留学先での取り組み内容及び成果

・研究活動

専門研究では、プログラミングを活用した骨補綴物の 3D スキャンおよび 3D プリントをテーマとする研究を行っている教授の指導のもと、分析機器(ICP-OES)による骨中のカルシウムの定量分析を行った。さらに、教員が作成したプログラムに自身のサンプルデータを入力する形で、Python を用いた X 線シミュレーションを実施した。

初めて扱う分析機器を用いた実験や解析に取り組んだことで、データに基づいて物質の特性を評価する力を身につけ、専門性の向上やスキルアップにつながった。また、実験や解析、文献調査、レポート作成を英語で行った経験から、専門的な内容を英語で理解し発信する力を養うことができた。

これらの経験は、今後の香り成分の分析や研究活動、さらには英語での情報収集や研究発表に活かせると考えている。

・フィールドワーク

本調査では、オーガニック製品を扱う店舗 2 店舗、量り売りを行う店舗 2 店舗の計 4 店舗を現地で調査するとともに、日本人 62 名、フランス人 56 名、留学生 5 名を対象に、香り・環境・香害に関する計 10 問のアンケート調査を実施した。

・アンケート調査

結果から、香りの使用や好みに関しては、両国で明確な違いが見られた。日本の学生は香水の使用率が低く、清潔感のある石けんや洗剤の香りを好む傾向が強かった。一方、フランスの学生は香水の使用率が非常に高く、フルーティーや花、植物系の香りを好む傾向が見られた。このことから、香りの使用習慣や好まれる香りのタイプには、文化的背景による違いが存在することが分かった。

また、香りによる不快感や体調不良については、日本の学生では香りによって体調不良を経験した回答者が過半数を占めたのに対し、フランスの学生ではその経験が非常に少なかった。この結果から、日本の学生は香りによる不快感や健康への影響をより強く感じている傾向があることが明らかとなった。

製品選択における重視点に関する調査では、日本の学生は「香りの良さ」を重視する一方で、価格やブランドへの関心はフランスより低い傾向が見られた。これに対し、フランスの学生は香りの良さに加えて価格も重視する傾向が強く、製品選択における価格意識の違いが確認された。さらに、環境意識については、日本の学生では環境配慮製品の購入頻度が「ほとんどない」と回答した割合が高く、環境配慮行動が限定的であることが分かった。一方、フランスの学生は環境配慮製品の購入頻度が日本より高く、製品選択の際に環境への影響を重視する傾向が見られた。

・店舗調査

量り売りやオーガニック製品を扱う店舗において、食品、洗剤、石けんなどの生活日用品が幅広く揃っており、環境配慮製品を入手しやすい環境が整っていることが確認できた。一方で、量り売りや洗剤の詰め替えには手間や時間がかかり、レジ待ちが長くなる場面も見られた。この点は、特に忙しい若年層にとって、環境配慮製品を購入する際の障壁となっている可能性がある。

また、客層はどの店舗でも 40 代以上の年配層が中心であり、学生などの若年層の利用は少ない傾向にあった。価格設定についても全体的に高めで、kg 単位での販売が主流であることから、価格を重視する学生層にとっては購入のハードルが高い実態が確認された。

以上の結果から、若年層は価格や利便性を重視する傾向が強く、環境配慮製品の購入頻度が低い一方で、実際のオーガニック・量り売り店舗は年配層を中心に利用されていることが明らかとなった。学生が環境配慮製品を購入する際の主な障壁は、価格の高さと量り売りや詰め替えに伴う手間の多さにあると考えられる。



4 当プログラムに参加しての感想・協賛企業へのメッセージ

人生初の 1 ヶ月に及ぶ海外滞在は、私の価値観を根底から変える経験となりました。渡航前はアジア人差別などの不安もありましたが、実際は通りすがりに笑顔で挨拶を交わしてくれるほどフレンドリーな人が多く、そのポジティブな佇まいから自己肯定感の高さを感じました。そんな彼らと過ごす中で、私自身もいつの間にかネガティブな思考を捨て、前向きで明るい気持ちで日々を過ごせるようになりました。

また、自炊を通じてスーパーに通う中で、フランスの食文化の豊かさに感動する一方、高価な日本食材を目にし、日本の物価の安さや品質の素晴らしさを再認識しました。ホストファミリーや先生、助けてくれた学生たちへの感謝は尽きません。

そして、協賛企業・団体をはじめとしたグローバル協議会、学生課ご担当の方、先生方、インターンシップ先である株式会社デジアイズの皆様に、心より感謝申し上げます。私のやりたいことに対して多大なるご協力をいただき、温かく迎えてくださったことに心から感謝しています。インターンシップでは、開発者・お客様双方の視点、作業の効率化や法規制といった実務のリアリティを学ぶことができ、学校の授業では得られない大変貴重な時間となりました。

5 留学費用について

留学奨学金：325,000 円

総費用：369,290 円

航空券：218,721 円

交通費：11,718 円

宿泊費：77,400 円

ホテル代：25,829 円

食費：15,624 円

その他：1,980 円

eSIM、保険料：18,000 円

自己負担：44,290 円

6 語学力について

留学当初は自分から流暢に話す力が不足していると感じていたが、相手の話す内容は概ね理解できていたため、疑問点を絞って質問することからコミュニケーションを始めた。英語で話す機会を重ねるうちに、間違えてはいけないという羞恥心が薄れ、途切れてもよいから一生懸命伝えようという姿勢へと意識が変化した。この経験を通じて、語学においては正確さ以上に、相手に伝えようとする姿勢が重要であることを実感した。留学中は英語の授業に参加し、計 2 回のプレゼンテーションを行った。そのうち 1 回は、スライドを見ずに 5 分間英語のみで発表する形式であり、自身にとって大きな挑戦であった。事前に十分な準備を行い、最後までやり切れたことで、英語で自分の考えを発信することへの自信につながった。正確さよりも、「伝えようとする姿勢」が相手に届くことを強く実感した経験である。

また、アンケート調査を進める過程では、英語で自分の意思を伝え、協力を仰ぐ必要があった。最初は勇気が必要であったが、一人ひとりに直接声をかけることで多くの回答を得ることができ、同時に現地学生の温かさや親しみやすさに触れることができた。この経験を通じて、間違えてはいけないという意識よりも、途切れても伝えようとする姿勢がコミュニケーションでは重要であると実感し、英語に対する心理的な壁が大きく下がった。

7 今後の展望

本プログラムを通じて、製品開発には技術的な知識だけでなく、データに基づく分析やターゲット理解が不可欠であることを学んだ。

この学びを卒業研究に活かし、今後は、岩手の資源を題材とした香り成分の分析に取り組むとともに、地域や社会の課題に目を向けたものづくりを目指したい。将来的には、地域資源と技術を結びつけ、社会に求められる価値を生み出せる技術者として成長していきたいと考えている。



1 留学テーマ

子どもたちの成長と郷土愛の育成

—スコットランドにおける文化継承の取り組みからの示唆—

2 事前事後インターンシップでの取り組み内容及び成果

インターンシップ先

○事前インターンシップ 花巻北中学校 （5 日間）

目的：地域に対する誇りや郷土愛、地域との関わり、将来の進路や就職先に関する意識を把握する。

また、岩手県の歴史・文化への接触状況や、日常的な運動習慣についても調査する。

成果：岩手県の魅力を理解している生徒は多い一方、将来住みたい場所として県外を選ぶ生徒が多いことがアンケートでわかり、郷土愛の希薄化が課題であると感じた。また、コロナ禍で伝統行事が中止となり、地域の文化や人々と関わる機会が減少している現状も確認できた。

○事後インターンシップ 日興電気株式会社 （3 日間）

目的：資金の流れやボランティアの集客方法、若者の育成や郷土愛の醸成に地域資源をどう活用するかを考察する。また、岩手県版ハイランドゲームズの開催に向けて具体的ヒントを得る。

成果：企画から広報、運営までの一連の流れを実践的に学んだ。特に、来場者の関心を引く情報発信や、「何を伝えたいのか」という目的を明確にすることの重要性を実感した。さらに、地域資源をどのように活用するか、持続可能なイベント運営に何が必要かという示唆を得た。

3 留学先での取り組み内容及び成果

1) 概要

本留学では、約 1 か月間スコットランドに滞在し、後述のハイランドゲームズ協会会長をはじめ、各大会主催者の厚誼を得て、複数のハイランドゲームズを視察した。文化継承イベントの取組を具に見聞し、県版ハイランドゲームズ開催に向けた示唆を得ることを目的とした。

※ハイランドゲームズ：スコットランドの伝統的スポーツ文化イベントで、重量競技、音楽・舞踊、体験型企画等から構成される。主に5月から9月に開催され、多くの観光客を集める。

2) 現地での活動について

複数の大会（下記5大会）を視察した結果、共通して以下の特徴が見られた。

- ① 家族連れを含む幅広い年齢層が楽しめる（参加できる）構成
- ② 競技と文化体験が融合したプログラム
- ③ 地域住民と観光客が一体となる雰囲気

また、ボランティアとして運営に参加したことで、受付や誘導など実務的な運営方法を体験することができた。民族衣装の着用など体験型の要素は、来場者自身が文化の担い手となる意識を高める効果があると感じた。

現地視察した大会（5大会）

① Stirling Highland Games	（観客として参加）	観客数 約 8,000 人
② Crieff Highland Games	（主催側からの視察）	観客数 約 7,000 人
③ Lonach Highland Games	（主催側からの視察）	観客数 約 5,000 人
④ Birnam Highland Games	（主催側からの視察）	観客数 約 4,000 人
⑤ Pitlochry Highland Games	（ボランティアとして参加）	観客数 約 7,000 人

3) インタビュー

スポンサーの減少や人員確保の難しさなど、ハイランドゲームズの開催が容易ではない現実も存在している。こうした課題について理解を深めるため、ハイランドゲームズ協会会長及び長年選手として参加している女性選手にインタビューを行った。

①会長インタビュー

観客の約70%が観光客であり、飲食や土産物、交通、宿泊など幅広い分野に経済効果をもたらしている、とのことであった。このことから、ハイランドゲームズは単なる伝統行事ではなく、地域観光を支える重要な資源であると感じた。

また、来場者を呼び込むためには、ソーシャルメディアや「Visit Scotland」を活用した広報が大きな役割を果たしている、とのことであった。このことから、現代的な情報発信を積極的に取り入れることで集客力を維持している点が、成功の要因の一つではないかと考えられる。

一方で、運営面では天候の影響や安全管理、車両動線の確保、人手不足といった課題がある、とのことであった。

資金面では、各大会がスポンサーを確保しつつ、地域全体での支援も組み合わせて運営している、

とのことであった。各大会の予算規模は小規模で約1万5,000ポンド、大規模では7万5,000ポンド以上と幅があることがわかった。

②女性選手へのインタビュー

ハイランドゲームズの魅力として、他のスポーツにはない独特の雰囲気や観客との距離の近さ、そして競技仲間や観客との「バンター（冗談を交えた会話）」を挙げた。

4) 岩手県の開催に向けて

ハイランドゲームズの成功要因は、体験価値の高さ、地域主体の運営、そして伝統と変化の両立にあると考えられる。

岩手県で実施する際には、地域住民・若者・観光客が共に楽しめる仕組みを構築し、地域資源を活用した持続可能な運営を行うことが重要である。

本視察を通して得たイベントの演出方法や観客の盛り上げ方などの発想を中心に学び、今後も自身の理想とする「岩手県版ハイランドゲームズ」の構想をさらに膨らませ、開催に向けて取り組んでいきたい。

4 当プログラムに参加しての感想・協賛企業へのメッセージ

スコットランドで見た、地域全体で盛り上がる姿は、私にとって理想の地域の在り方そのものであった。この経験を生かし、岩手県版ハイランドゲームズの実現に向けて取り組んでいきたいと強く感じている。

将来、教員として岩手県に貢献したいという思いから、「どのように子どもたちを支え、地域の良さを伝えていくべきか」を改めて考えるようになった。県の教育課題を調べる中で、特に若者の県外流出が大きな問題であると知り、身近な例として、父が経営するおおのミルク工房でも若者の定着が課題となっていることから、その深刻さを実感した。だからこそ、子どもたちが地域に誇りや愛着を持てるよう、教育を通して支えていきたいと考えるようになった。

そのような思いを抱く中で本プログラムに出会い、挑戦を決意した。富士大学からは前例がなく、多くの困難があったが、さまざまな方々の支えにより留学を実現することができた。現地ではハイランドゲームズの観戦やボランティア活動を通して、地域や企業、老若男女が一体となって盛り上がる様子を体感し、岩手県の目指すべき姿と重なるものを強く感じた。この経験は、自ら課題に向き合い行動する大切さを学ぶ機会となり、挑戦することの楽しさにも気づくことができた。

今回の貴重な機会を与えてくださった協賛企業・団体の皆様、グローバル協議会、大学関係者の皆様、指導教員、インターンシップ先の皆様に心より感謝申し上げます。今後は本プログラムで得た学びを生かし、岩手県版ハイランドゲームズの実現を目指すとともに、地域や教育に貢献できる人材になれるよう努力していきたい。

5 留学費用について

留学総費用：約 55 万円

【内訳】

・日本での交通費：3 万 2,470 円（飛行機）	／	・往復渡航費：20 万円
・ホームステイ：10 万 2,841 円	／	・保険料：4 万 7,150 円
・eSIM：1 万 4,000 円	／	・交通費：4 万円
・食費：5 万 6,000 円	／	・雑費：6 万円

6 語学力について

渡航前の英語力は日常会話も十分にできるレベルではなく、一人で生活できるのかという不安を抱えたまま出国した。初めてのフライトでは、隣に座ったイングランド出身の夫婦が声をかけてくれたが、うまく聞き取ることができず、ジェスチャーを交えながら何とか会話をした。また、乗り換えの際にはゲートを間違えてしまい、うまく尋ねることもできず、ぎりぎりまで搭乗するなど、不安を感じる場面が多かった。

スコットランド到着後も、特有の訛りや話すスピードに慣れず、当初は相手の言葉を理解するだけで精一杯であった。しかし、英語が流暢でなくても積極的に人と関わることを心がけた。現地の人々はとても温かく、拙い英語にも丁寧に向き合ってくれたため、次第に不安は薄れ、自分の意見も少しずつ伝えられるようになった。

この経験から、語学力だけでなく、伝えようとする姿勢の大切さを実感した。今後も英語学習を継続し、多様な価値観に触れられるツールとして英語を活用できるよう努力していきたい。

当協会における海外留学派遣支援実績
(平成 29 年度～令和 7 年度)

I 概況

支援スキーム		文部科学省 トビタテ！留学 JAPAN				協会独自					
派遣年度		H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	計
応募者数 (人)		8	7	9	8	—	6	5	8	8	59
支援者数 (人)		7	5	8			3	3	7	6	39
奨学金等 支給額 (千円)		4,816	2,774	7,142	新型コロナウイルスの感染 拡大のため派遣中止		1,203	1,451	2,654	1,775※	21,815
内 訳	国交付 金 (千 円)	3,064	1,664	3,997			—	—	—	—	8,725
	協会 (千円)	1,752	1,110	3,145			1,203	1,451	2,654	1,775※	13,090

※事後インターンシップの実施状況によっては金額が変更となる可能性あり

2 支援内容

(派遣学生所属先、概要 [①海外研修テーマ、②海外研修期間と研修国、③事前事後インターンシップ先])

平成 29 年度 (支援者 7 名) 《トビタテ！第 7 期生》		
1	岩手大学 教育学部	① カナダの駅舎から受けるインスピレーションを活用した魅力的な「玄関」としての駅舎 構築による、列車を利用したいわて観光の浸透《コース C》 ② 1 か月／カナダ ③ 事前事後) IGR いわて銀河鉄道(株)、(株)サラダファーム
2	岩手大学 農学部	① 世界へ羽ばたけ！ Japanese SAKE 南部美人《コース A》 ② 2 か月／アメリカ ③ 事前事後) (株)南部美人、酒米農家、事前のみ) Sake Discoveries, LLC
3	岩手大学 人文社会科学部	① 「岩手発」で再生可能エネルギーの浸透を－欧州の先行事例に学ぶ－《コース D》 ② 5 か月／ドイツ・スイス ③ 事前) 岩手県中小企業家同友会 事後) サステナジー(株)岩手営業所
4	岩手大学 農学部	① ロハスの理想郷を目指して 地域と考える、豊かなまちづくり《コース D》 ② 2 か月／イギリス、ドイツ、スイス ③ 事前事後) 岩手県中小企業家同友会
5	岩手大学 人文社会科学部	① 世界の被災地から学ぶ多文化社会《コース D》 ② 1 か月／インドネシア ③ 事前) 岩手県総合防災室、遠野まごころネット 事後) 遠野まごころネット
6	岩手県立大学 盛岡短期大学部	① “被災地いわて” から “観光の街いわて” へ！ 私たちが住みたくなる街は、私たちの手で 作る。《コース C》 ② 6 か月／台湾 ③ 事前) (株)岩手ホテルアンドリゾート 事後) 北上観光コンベンション協会

7	一関工業高等 専門学校	① バイオマス分解因子と基質の相互作用観察（等温滴定型熱量測定）《コース D》 ② 1 か月／ノルウェー ③ 事前）（公財）岩手県南技術研究センター 事後）岩手県農業研究センター
平成 30 年度（支援者 5 名）《トビタテ！第 9 期生》		
1	一関工業高等 専門学校	① タイでの多様なコメ食文化を通じて岩手の米の消費拡大を考える ～米麺の可能性・三大麺から四大麺へ～《コース C》 ② 1 か月／タイ ③ 事前）（公財）岩手県南技術研究センター 事後）岩手県農業研究センター
2	岩手大学 農学部	① リンゴで橋を。岩手からベトナムへ《コース A》 ② 5 か月／ベトナム ③ 事前）（株）柳家・白金運輸（株） 事後）（株）柳家
3	岩手大学 人文社会科学部	① I DESIGN いわての木製雑貨で起業！《コース A》 ② 3 か月／イギリス、フィンランド ③ 事前事後）岩泉純木家具（有）
4	岩手大学 農学部	① かもめの玉子の力で岩手の魅力を世界へ発信！《コース A》 ② 2 か月／台湾 ③ 事前事後）さいとう製菓（株）
5	岩手医科大学 医学部	① ハンガリー ペーチ大学での短期留学《コース E》 ② 1 か月／ハンガリー ③ 事前事後）岩手県医師会
令和元年度（支援者 8 名）《トビタテ！第 11 期生》		
1	岩手医科大学 医学部	① ハンガリー ペーチ大学にて医療を学ぶ《コース D》 ② 1 か月／ハンガリー ③ 事前事後）県内医療機関
2	一関工業高等 専門学校	① RMIT(Royal Melbourne Institute of Technology) 大学で行う、漫然運転防止のための ウェアラブル型デバイスの開発《コース B》 ② 3 か月／オーストラリア ③ 事前事後）（公財）岩手県南技術研究センター
3	岩手大学 人文社会科学部	① 大船渡市の活性化を目指す観光のエキスパートへの第 1 歩プロジェクト 《コース C》 ② 2 か月／アメリカ ③ 事前事後）大船渡市商工港湾観光推進室、JF 綾織漁業協同組合
4	岩手大学 教育学部	① 児童文学を生かした観光《コース C》 ② 2 か月／カナダ ③ 事前）花巻市生涯学習部賢治まちづくり課、花巻観光協会 事後）花巻市生涯学習部賢治まちづくり課
5	岩手大学 教育学部	① 表情豊かな自然で伝えるいわて観光の魅力《コース C》 ② 5 か月／カナダ ③ 事前事後）盛岡市市民文化部文化国際課、岩手県商工労働観光部観光課、 IGR いわて銀河鉄道

6	岩手大学 理工学部	① 自然が豊かな岩手県における、木質バイオマス資源の利用による循環型社会の実現をスウェーデンから学ぶ《コース D》 ② 5 か月／スウェーデン ③ 事前事後) 紫波グリーンエネルギー(株)
7	岩手大学 教育学部	① 地域に根差した ICT 教育～児童の未来を支え、教員に負担の少ない社会を創る《コース E》 ② 5 か月／オーストラリア ③ 事前事後) 県内小学校、岩手県立総合教育センター、IGR いわて銀河鉄道他
8	岩手大学 教育学部	① インクルーシブ教育の充実に向けて《コース E》 ② 6 か月／オーストラリア ③ 事前事後) 県内小中学校
令和 2 年度		
新型コロナウイルス症の感染拡大のため、応募学生の採用を見送った。		
令和 3 年度		
新型コロナウイルス症の感染拡大のため、海外留学派遣募集を中止した。		
令和 4 年度		
1	岩手大学 農学部 共同獣医学科	① 岩手県の家族経営型酪農家の魅力を広げる《コース E》 ② 38 日間／フランス ③ 事前) 湯田牛乳公社、中洞牧場、小岩井農場、伊藤農場 事後) 温泉ジェラート、三谷牧場
2	岩手大学 農学部 共同獣医学科	① スイスのヒツジ・ヤギ飼育とその活用を学ぶ《コース E》 ② 43 日間／スイス ③ 事前) 下大桑ヒツジ飼育者の会、しあわせ牧場、中村工房、ムンフバットさんの羊牧場 事後) 下大桑ヒツジ飼育者の会、しあわせ牧場、ムンフバットさんの羊牧場
3	一関工業高等 専門学校 未来創造学科	① タイ・バンコクにおける岩手の食・文化・観光の魅力の発信と調査《コース A》 ② 20 日間／タイ ③ 事前事後) (公財) 岩手県南技術研究センター
令和 5 年度		
1	岩手県立大学 総合政策学部 総合政策学科	① 岩手アンバサダーを育成するための土台作り《コース E》 ② 39 日間／カナダ ③ 事前事後) (株)TS(個別教室のトライ盛岡南校)、盛岡ミッションえいご塾
2	一関工業高等 専門学校 未来創造学科	① 環境大国フランスに学ぶ環境保全方法とその実践活動《コース D》 ② 41 日間／フランス ③ 事前) (公財) 岩手県南技術研究センター、Next Iwate、(株)TOLIM 事後) (公財) 岩手県南技術研究センター、Next Iwate
3	盛岡大学 文学部 英語文化学科	① 県産品を世界へ！《コース E》 ② 26 日間／カナダ・アメリカ ③ 事前) 岩手日報社、みちのくコカ・コーラボトリング(株)、紫波サイダリー(同) 事 事後) みちのくコカ・コーラボトリング(株)、紫波サイダリー(同)

令和 6 年度		
1	岩手県立大学 ソフトウェア情報学部 ソフトウェア情報学科	① 磯焼け、藻場再生に関する調査及び普及活動《コース D》 ② 26 日間／オーストラリア ③ 事前事後) 大槌町藻場再生協議会
2	一関工業高等 専門学校 未来創造学科	① ～次世代へ工学の魅力を伝えるために～フランスで学ぶ STEAM 教育《コース D》 ② 35 日間／フランス ③ 事前) リニューアルブルジャパン (株)、PLOT、シミック CMO (株)西根工場、 (株)長島製作所 前沢工場 事後) シミック CMO (株)西根工場、PLOT
3	一関工業高等 専門学校 未来創造学科	① 岩手県の環境保全意識の強化と高齢化問題の対策《コース D》 ② 27 日間／フランス ③ 事前事後) Next Iwate
4	一関工業高等 専門学校 未来創造学科	① 電気×AI で、SDG s と高齢化社会の孤独死問題に取り組む《コース D》 ② 40 日間／フランス ③ 事前事後) 磐井 AI(株)
5	岩手大学 農学部 植物生命科学科	① アイスランドから見る岩手の農業～地熱を活用して岩手の農耕活性化を図る～《コース D》 ② 15 日間／アイスランド ③ 事前) NPO 法人 SET(葛巻町役場くずま～、江刈馬淵自治会、いわてユースセンターミライト) 事後) NPO 法人 SET(江刈馬淵自治会)
6	岩手大学 農学部 森林科学科	① 岩手の森林環境のポテンシャルを最大限に引き出す！《コース E》 ② 15 日間／ドイツ ③ 事前事後) NPO 法人遠野エコネット
7	盛岡大学 文学部 英語文化学科	① 地域に携わる日本語教師への第一歩《コース E》 ② 29 日間／カナダ・アメリカ ③ 事前事後) TVA 日本語教室、上野法律ビジネス専門学校
令和 7 年度		
1	岩手県立大学 盛岡短期大学部 国際文化学科	① 岩手の文化を伝えられる、生活に寄り添った日本語教師を目指して《コース E》 ② 17 日間／インドネシア ③ 事前事後) 盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校 日本語学科、TVA 日本語教室、 公益財団法人 花巻国際交流協会 (事前のみ)
2	岩手大学 理工学部 システム創成工学科	① フィリピンで学ぶ、ボーダーレスな地域づくり《コース D》 ② 50 日間／フィリピン ③ 事前事後) 一関市国際交流協会
3	岩手大学 教育学部 特別支援教育コース	① 孤児スクールボランティアでインクルーシブ教育の第一歩を!!《コース E》 ② 15 日間／タイ ③ 事前事後) YUME School 盛岡校
4	一関工業高等 専門学校 未来創造工学科	① フォトバイオリアクターの開発・設置に向けた議論《コース D》 ② 25 日間／フランス ③ 事前事後) 岩手県南技術センター

5	一関工業高等 専門学校 未来創造工学科	① 岩手の資源を生かす香りと暮らし ～フランスから学ぶ持続可能なライフスタイル～ 《コース D》 ② 25 日間／フランス ③ 事前事後) 株式会社デジアイズ
6	富士大学 経済学部 経営法学科	① 子どもたちの成長と郷土愛の育成： スコットランドにおける文化継承の取り組みからの示唆 《コース D》 ② 30 日間／スコットランド ③ 事前) 花巻北中学校 事後) 日興電気株式会社

令和 7 年度 いわてグローバル人材育成推進協議会 年間取組状況

	実施内容
4 月	4 月 10 日(木)、14 日(月)、15 日(火)、18 日(金) 令和 7 年度派遣募集説明会
5 月	5 月 8 日(月) 令和 6 年度決算監査 5 月 15 日(水) 応募申請受付締切 5 月 16 日(木)～22 日(水) 要件審査 5 月 30 日(水) 第 1 回運営委員会
6 月	6 月 7 日(土) 面接審査 6 月 10 日(水) 令和 7 年度総会 令和 6 年度派遣学生成果報告会 6 月 11 日(木) 派遣学生決定
7 月	7 月 12 日(土) 事前ガイダンス(安全講習、計画紹介等) 7 月 31 日(水) 外国留学生等の県内企業訪問 ((株)大昌電子 岩手工場)
11 月	11 月 1 日(土) 外国人のための県内就職ガイダンス
12 月	12 月 2 日(火) 県内学生と企業とのワークショップ 12 月 6 日(土) グローバルキャリアフェア in 岩手
1 月	1 月 20 日(火) 第 1 回グローバル人材育成プロジェクトチームミーティング 1 月 30 日(木) 第 2 回運営委員会
2 月	2 月 17 日(月)、18 日(火) JET プログラム参加者、外国人留学生等を対象としたインターンシップ 2 月 6 日(金) 令和 8 年度募集説明会(岩手県立大学) 2 月 9 日(月) 令和 8 年度募集要項公開 2 月 19 日(木) 令和 8 年度応募申請受付開始
3 月	3 月 25 日(水) 令和 8 年度募集説明会(盛岡大学)

※水色：海外留学支援事業に関する取組 ※橙色：外国人留学生等の定着支援事業に関する取組

「いわてグローバル人材育成推進協議会」会員企業・団体

令和 8 年 6 月 1 日現在

第 1 号会員

団体

公益財団法人岩手県観光協会 岩手県商工会連合会	一般社団法人岩手県建設業協会 岩手県中小企業団体中央会	岩手県商工会議所連合会
----------------------------	--------------------------------	-------------

企業

I G Rいわて銀河鉄道株式会社 いわぎん事業創造キャピタル株式会社 株式会社岩手日報社 株式会社北日本銀行 株式会社 JTB 盛岡支店 株式会社千田精密工業 株式会社東北銀行 株式会社ナレロー 株式会社ベスト 盛岡ターミナルビル株式会社 谷村電気精機株式会社 和同産業株式会社	アイシン東北株式会社 株式会社岩手銀行 株式会社岩手ホテルアンドリゾート 株式会社ゴーイングドットコム 白金運輸株式会社 株式会社中央コーポレーション 東北リゾートサービス株式会社 株式会社南部美人 株式会社ミクニ 株式会社盛岡地域交流センター リコーインダストリアルソリューションズ株式会社花巻事業所	株式会社アイビーシー岩手放送 岩手県北自動車株式会社 及源鑄造株式会社 さいとう製菓株式会社 株式会社たまごファクトリー 株式会社テレビ岩手 株式会社トーノ精密 株式会社日ピス岩手一関工場 みちのくコカ・コーラボトリング株式会社 株式会社柳家
--	---	--

機関

岩手県	岩手大学	公益財団法人岩手県国際交流協会
-----	------	-----------------

第 2 号会員

団体

一般社団法人岩手経済同友会 岩手県中小企業家同友会 独立行政法人国際協力機構東北センター	一般社団法人岩手県医師会 いわて高等教育コンソーシアム 公益財団法人ふるさといわて定住財団	岩手県森林組合連合会 公益財団法人いわて産業振興センター
--	---	---------------------------------

企業

株式会社アイシーエス 株式会社岩手めんこいテレビ 株式会社小林精機 株式会社十文字チキンカンパニー 株式会社デンソー岩手 東京海上日動火災保険株式会社盛岡支店 花巻温泉株式会社 富士通 Japan 株式会社	岩手県空港ターミナルビル株式会社 川嶋印刷株式会社 三陸鉄道株式会社 株式会社西部開発農産 株式会社東亜電化 東北電力株式会社岩手支店 富士フイルムビジネスイノベーションジャパン株式会社岩手支社 株式会社ユアテック岩手支社	岩手県産株式会社 けせんプレカット事業協同組合 株式会社ジャパンセミコンダクター 株式会社タカヤ 東京エレクトロンテクノロジーソリューションズ株式会社 株式会社長島製作所 株式会社吉田測量設計
--	--	--

市町村

盛岡市 北上市 雫石町 西和賀町	大船渡市 一関市 紫波町 軽米町	花巻市 奥州市 矢巾町
---------------------------	---------------------------	-------------------

いわてグローバル人材育成推進協議会

令和 8 年 6 月

Email glocal-iwate@iwate-ia.or.jp

URL <https://iwate-glocal.jp/>

- 岩手県ふるさと振興部国際室内 〒020-8570 盛岡市内丸 10-1
TEL 019-629-5765 FAX 019-629-5254
- (公財) 岩手県国際交流協会 〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通 1-7-1
いわて県民情報交流センター (キオクシア アイーナ) 5 階
TEL 019-654-8900 FAX 019-654-8922